

戦争体験を自分史に

八戸の「かおるゝむ」 サロンアドバイザー 橋本さんが作製支援

生きて証しを残したい。高齢者のそんな願いを、八戸市番町の生涯学習サロン「かおるゝむ」が自分史の作製で実現させている。聞き取りや文字起こしなどの作業を担うのは、サロンアドバイザーの橋本亮子さん(57)。特に戦争体験を記録しておきたいという要望は多く、時代背景などを勉強しながら一人一人と向き合っている。橋本さんは「戦争のことを家族に話にくいという人は少なくないが、子孫はきくと知りたいはず。貴重な体験を後世に伝える手伝いができれば」と意欲を語る。

(田村祐子)



西川末春さん(右)と打ち合わせをする橋本亮子さん=9日

同サロンではパソコン教室や脳トレなどの講座を開いており、家系図などに興味があった橋本さんが本年度、自分史講座を始めた。1時間千円で基本は手書きだが、希望があれば別料金で印刷・製本できる。

9日、橋本さんは作製中の自分史を手に、打ち合わせのため八戸市長苗代の八戸塗料販売を訪れた。自分史は北方四島の択捉島出身で、同社社長の西川末春さん(82)の物。戦後、旧ソ連の占領で故郷を奪われ、日本に強制送還された経歴を持つ。

同社長でもある長男の禎(のり)さん(54)が「父親の壮絶な体験を、会社創業の歴史とともに後世に伝えたい」と作製を依頼した。

「択捉島についてはほとんど何も知らなかった」という橋本さん。北方領土をテーマにした映画を見るなど勉強し、聞き取りに臨んだ。末春さんは島の豊かな自然や平和な生活、つらかった引き揚げ体験などを鮮明に記憶しており、禎さん

勉強重ね、依頼者と向き合う

が初めて聞くエピソードもあったという。本の見本を受け取り、島内の写真や家系図を懐かしそうに眺める末春さん。「本当はあまり苦勞話をしたくないんだ」としつつ、「いい機会だったのかな」と満足げな表情を浮かべた。

同市妙の久保沢鉄男さん(90)も、橋本さんの協力を得て、17、20歳ごろの戦争体験を一冊にまとめた。自分史「天は自ら助くる者を助く」には、戦車の訓練を受け中国へ渡り、過酷な任務を一人で完遂したことや、東京大空襲直後の惨状を目の当たりにしたことなど、強烈な記憶がつつられている。

完成した自分史を手に、久保沢さんは「橋本さんがやってくれて良かった」と感謝しつつ、多くの知人が亡くなっていることから、「あと10年早く作りたかった」と漏らした。

自分史の作製について、橋本さんは「戦争世代のリアルな話が聞けて、勉強になる」とやりがい語る。第三者が入ることで、家族に直接言いにくいことを記録できる効果があると感じている。「二人一人と向き合って大事に作りたい」とほほ笑んだ。

自分史作製の問い合わせは「かおるゝむ」電話0178(51)6161へ。